

## 第25回「CCJケースメソッド研究会」(2018年6月15日開催)

日本ケースセンターは、ケースメソッド授業の運営能力の向上に資するため、参加者同士で研鑽する「CCJケースメソッド研究会」を開催しています。

今回の会合では、ケースリーダーをお引き受けいただいた、産業能率大学総合研究所の本橋潤子氏の十年来の専門研究領域である日本の「企業倫理」教育をテーマに据えました。日本における企業倫理は、比較的新しい経営課題であるということですが、実務の場では、不祥事防止や、誠実な組織づくりのために、早くからケースメソッドによる企業倫理教育が注目されており、個人と組織の学習を引き起こす上で「ケースによる討議」は有効である旨、ご紹介がありました。

そこで、その一端を垣間見るべく、まず導入討議として、Dardenの翻訳ケース「雪印乳業(A)・(B)・(C)」を使いました。雪印乳業が過去に引き起こした食中毒事件(2000年)、子会社であった雪印食品の牛肉偽装事件(2001年)後の再生の取り組みが描かれており、重大な危機に直面した企業の責任について考察し、ブランドの再建のあり方、日本の企業倫理教育の課題について意見交換し、ケースリーダーの十年来の専門研究領域である日本の企業倫理教育を概観しました。続いて、ケースリーダーが作成したA4紙半ページ程の「ミニケース(現在未公開)」を使った討議へと展開し、ケースを用いて行う企業倫理教育の原初形をご紹介いただきました。



最後の「全体討議」ではモデレーター竹内伸一先生を中心に、前半のケースリードと討議を振り返りながら、ケースメソッドによる企業倫理教育の可能性や参加者の気づきを全体で共有しました。

参加者のアンケート回答からは、1)『倫理の問題を理解するには、ケースを介して有効になると確信した』、2)『初回の参加で、どこまで貢献できるか不安もありましたが、参加者として特にミニケースの討議は学ぶ点が多くございました』、3)『多くの専門家の方々とご一



緒させていただき、意見交換できたことで、多様な気づきと学びを得ることができました』といったお声をいただき、大変実りのある会合となりました。両先生には重ねて感謝申し上げます。今後も引き続き工夫を凝らし、はじめての方にも参加しやすい会合を開催して参ります。